

産業能率大学

[SANNO UNIVERSITY]

学生を 主体的学習者に変える 大学の教育とは



開発した学習アプリ「産能大発音道場」を使った発音練習の様子

産業能率大学では、これまでもPBLやアクティブ・ラーニングなどをいち早く導入して、学生の主体性を育み、主体的学習者の育成に力を注いできた。前記事でも紹介した日経キャリアマガジン「就職ランキング特集」の中の、学生に「行動力」があるという項目（「熱意がある」「主体性がある」「チャレンジ精神がある」の3項目で構成）で、全国大学中で21位、全私大中では6位にランキングされている。こうした学生の主体性を、同大学ではいかに育てているのだろうか。その取組について取材した。

取材・レポート／教育ジャーナリスト 友野伸一郎

知識のインプットと アウトプットを組み合わせた 「ユニット科目」

経営学部長の松尾 尚教授は、「学生の主体性を育成するのはとても難しいことです」と語る。しかし、それを前提としたうえで、同大学が徹底しているのは、「知識は使うためにある」ということだ。「いつかそのうち役に立つ知識」を漠然と学ぶのでは、よほど明確な将来像や、それに向けての強いモチベーションをもった学生しか「自分ごと」として内容を捉えることが難しい。このために、同大学では「ユニット科目」という仕組みを2013年から導入し、理論科目で学んだ知識をすぐに実践科目で活かすカリキュラムを構築している。

しかし、単にそうしたカリキュラム設計をただで、学生の主体性が育まれるわけではない。例えば大学の教

員の間にも、アクティブ・ラーニングやPBLなどで、学生らしい閃きのアイデアが出たら主体性が発揮されていて「よし」としてしまいう傾向がある。しかし、「それではダメなんです」と松尾教授は言う。

例えば、企業の抱える課題を解決するPBL授業だとすると、まず企業業績を調べて事実を把握し、そのうえで好調か不調かなどを解釈する。そして、どうしたらいいかの仮説を構築して行動目標値を定め、改革案を実行（プレゼンなど）するという流れが重要である。そこで、産業能率大学では経営学部長の松尾教授がすべてのシラバスをチェックして、いきなりアイデア出しを求めるような授業があれば見直しを求めている。その結果、学生たちが、理論科目で知識の引出しを増やし、事実把握→解釈→仮説構築を前段階としてしっかり取り組むことで、アイデアの質が大きく高まってきたという。



経営学部長
松尾 尚教授

人は学び続ける人からしか学べないー教員自身がイノベーションを起こす

ところで、学生の主体性を育むうえで、欠かせないことがひとつある。それは教える側の主体性である。人は、学ぶことをやめた人から学ぶことはできない。言い換えれば、学び続ける人からしか学べないのである。

産業能率大学では、学生の主体性を育む一環として、いかに学生の「リーダーシップ」と「計画立案力」を高めるかを課題にしている。そして、毎月1回、全教員参加で開かれるFD研修会に

において、グループワークで「リーダーシップ」か「計画立案力」を向上させる授業計画を考え、それを最終的にはシラバスに反映して授業実践に活かしている。教員自身が課題を発見し、仮説構築し、実行しているわけである。

もうひとつ紹介しておきたいのが、同大学のコロナ禍への対策である。このコロナ禍に対して2月には前期の全授業をオンラインで実施することを決定し、3月中旬には非常勤講師を含む全教員への説明会を開いて、すべての科目のシラバスを到達目標の維持を大原則としつつ、オンラインに対応したものに改訂した。講習会やマンツーマン指導も行い、オンライン授業の質も大きく向上させていったのである。

つまり、このプロセス自体が教員が自己変革イノベーションを起こすプロセスでもあり、そのプロセスは学生にも好影響を与えている。

そうした結果、前期の授業に対する学生による授業評価アンケートは、対面授業が行われていた例年と比較しても評価が下がることはなかったのである。教員の学び続ける姿勢こそが、学生の主体性を引き出す鍵となるのではないだろうか。

エディター養成プログラムで実際に雑誌を企画・制作する

産業能率大学で人気の高い科目に「エディター養成プログラム」がある。大学における人気の高い科目の多くは、単位の取りやすい「楽勝科目」であったりする場合が多いのだが、この科目の授業時間外学習は1回の授業について5〜6時間にも及ぶ。楽勝とは正反対の科目であるにもかかわらず、履修希

望者は常に定員の2倍程度にも達している。その理由は何だろうか。

この科目は、40人ほどが4人のグループに分かれて、前学期をかけて1冊（48ページが基本）の雑誌を企画し、ロケハン・取材・執筆・レイアウトし、実際に製本して制作。最終14回目にプレゼンするという授業だ。

担当するのはマガジンハウス社で『クロワッサン』『BRUTUS』『Hanako』などの編集を手がけた平城好誠講師。

「学生たちはプロの編集者を目指しているわけではありませんが、0から1を生み出す面白さを感じて、夢中で取り組んでいます」という。

雑誌の種類はいろいろとあっても、その基本は同じであり、まず制作しようとする雑誌について①雑誌名を決める。②コンセプトを明確にし、さらにキャッチコピーを決める。③読者ターゲットを細かく設定する。④8月号にふさわしい特集を決める。

そのうえで、48ページの台割を、30ページの特集、10ページの定例記事、4ページの広告などと決めて文字ベースで作る。そして、取材対象を捜しに行くのがロケハン。自分たちで編集者視点になって、「絵になりそうか」「面白い話が聞けそうか」などを基準にして探す。SNSや知っていいそうな人に尋ねたりして、ネットワークを活用することも推奨する。

ロケハン取材が終了し素材が集まったら、今度は紙に各ページのラフデザインを描いてみる。そこで、読みやすくリズムのある構成になっているかを検討し、レイアウト作業に進んでいくのである。

このプロセスで、平城講師はプロの視点から取材の依頼の仕方などのさまざまなノウハウも教えている。なかには「撮影には白い布を持って行くと、料理や小物撮影の際に下に敷くときれいだし、レフ板の代わりになる」といったものもあり、学生はちょっとした工夫で人への伝わり方が異なっていくことを、身をもって経験するのだ。



元マガジンハウスの雑誌編集のプロ平城好誠講師

授業時間外にも学生が熱中して取り組む理由

このプロセスのほとんどが授業時間外に行われているのである。にもかかわらず、すべての学生が熱中して取り組む。

「自分の思い込みだけでは伝わらないし、伝わらなければ情報ではありません。それを形にする面白さが、学生の主体性を引き出していると思います」

学生からは、「やりきってよかった」「チームで作る面白さを体感した」「自分の足で探す体験の大切さを知った」などの感想が寄せられている。本物の第一線の編集者である平城講師の指導を受けながら、実際に自分たちで発案・企画・取材・制作を行っていくプロセスのなかで、学生たちはものを創る楽しさを感じ、「伝えたい」という思いが高まり、学生の主体性が発揮されて、それが彼らの成長につながっているのだ。

ところで、この科目も今年はZoomによるオンライン授業に切り替えられた。リアルなロケハンや取材は不可能になったが、ネットを駆使して情報収集を行った。一次情報を自分たちの周辺から集めるという制約がなくなったぶん、海外の情報を取り込んだりして「アフターコロナで行きたい海外旅行特集」などのユニークな企画が案出され、レイアウトを工夫したりするなどして、例年に劣らない質の高い雑誌ができあがったのである。

学生たちが雑誌づくりを「自分ごと」としてとらえ、現実と向き合って本物の体験を重ねていくことで成長していく。

こんな授業が学生を主体的・自律的学習者へと育てていくのである。



学生たちが制作した雑誌

学生の主体性を引き出す英語授業

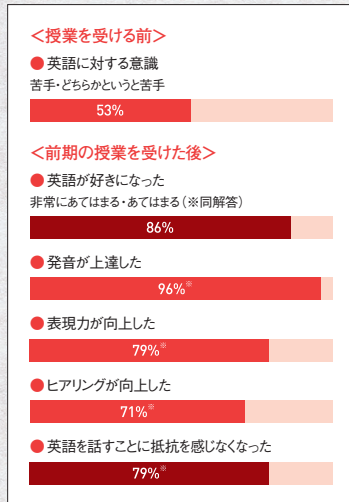


授業受講後のアンケートが示していること

主体性育成のための仕掛けは、エディター養成プログラムのようなPBLだけではなく、英語の授業にも埋め込まれている。今年から開始された経営学部1年次必修の英語教育「SANN0 English Program」は、主体的・自律的学習者を育成するという面でも画期的だ。

まず学生たちの反応を授業受講後のアンケートから見てみよう。

● 授業受講後のアンケート (N=92)



このアンケートからは、英語の上達だけでなく、学生が主体的に取り組むようになった姿も読み取れる。それはなぜか。筆者は、日本の高校までの英語教育の問題点は、多くの場合、伝わらないから使えない、使えないから面白くない、面白くないから英語が嫌い

になる、という悪循環にあると考えている。

この悪循環を断ち切るように、まずは英語は使えなければ意味がないという考えを出発点に置き設計されたのが「SANN0 English Program」である。

このプログラムは、「発音の鬼」として知られるリチャード川口先生(同大・客員教授)と産業能率大学が共同開発したもののだが、大学側から開発に参加した米元洋次専任講師は「英語は使ってみて、それを振り返り、自覚するというサイクルが重要です」と語る。学生が使う場面を意識しつつ学べること、実際に英語を使う場面が用意されていることが決定的に重要なのだ。それがなければ、モチベーションももちにくいと指摘する。

ネイティブの発音をマスターし、表現のバリエーションを増やし、英語脳を鍛える

具体的に内容を見てみよう。授業は1クラス20人以下の少人数で、週2回、1回100分で行われ、通年で全56回開講される。毎回の授業時間の約半分が発音のトレーニング、残り半分は英語表現(前期)や英語脳を鍛える(後期)ことにあてられる。リチャード川口先生が出演する映像教材を視聴し、その後、クラスを担当する教員が教室で展開。ペアワークなどでロールプレイをしながら学んだ発音や表現を実際に使ってみる。さらに学習アプリ「産能大発音道場」を使用し、授業内外で発音の徹底習得を目指すというのが基本構成だ。

後期では英語脳を鍛えるため、英語を使



米元洋次
専任講師

うためのマインドを学んでいく。例えば、自信をもって話す、間違っても気にしないという心構えから、会話をとめないためのテクニックを理解していく。学生たちは修得したテクニックを駆使し、1分間会話を止めず英語で話すトレーニングなどを行うことで英語でのコミュニケーションスキルを向上させていく。ほかにも伝えたいことが思いついたら、一番伝えたいことは何かを考え、簡単な日本語に直してから知っている英語に変換する練習を積む。知っている単語でも伝えたいことが伝わることを理解することで、アウトプットすることへの苦手意識を克服していくのだ。

今年始まったこの新しいプログラムは、コロナ禍でZoom授業となったが、ブレイクアウツセッションなどを使いこなして、リアル授業に劣らない授業のクオリティが維持されている。そうした取組もあって、冒頭のアンケートにおける高い評価に結びついているのである。

学生に常に英語を使う場面を意識させ、「通じるから使えるし使いたい」「使えるから楽しい好きになる」という好循環を生み出している。英語を話すことを「自分ごと」にし、本物を体験することで、学生を主体的・自律的学習者へと育てている好例である。

Student voice

抵抗感が吹き飛ぶ、これまでとはまったく違う授業

加藤藍野さん(東京都立武蔵高校出身)



発音や表現のインプットだけでなく、アウトプットの機会が多くあるので英語を話すことへの抵抗感が吹き飛んでしまう、これまでとまったく違う授業です。

発音を学ぶ際は口の動かし方、舌の使い方など、動画でわかりやすく学ぶことができました。先生が一人ひとりの発音を聞いてアドバイスをしてくれるのと、アプリ「産能大発音道場」で練習することで、発音が良くなっていることが目に見えてわかり、モチベーションが高まりました。また表現レーターを使って意味合いの強弱や、表現の丁寧さの度合いなど、辞書には載っていないニュアンスを知ることができたので、学んだ表現をすくなくても使ってみようと思いました。

この授業を受けた後は、ラジオやYouTubeで流れる英語が自然と耳に入ってくるようになったので発音や表現だけでなく、ヒアリング力も向上していると実感しています。